世界の子供たちの人権について

中　三

人権―。それは世界中で生きる全ての人々の生命が保障され、自由・名誉などを享受する権利だ。この権利があることで、私たちは生まれた瞬間から、当たり前に「人」として生きることができている。しかし世界には、その当たり前が当たり前ではない地域があるという現実がある。この現実を変えるために、私たちには何ができるのだろうか。

私が世界の教育事情について興味をもったのは、つい最近のことだ。きっかけは母の一言だった。「ランドセル、アフガニスタンに送ってみない？」

私はこの母との会話の中で、世界には教育を受けたいと願う多くの子供たちがいること、しかしその願いが実現されていないという現実を知った。私はこの現実に対し、疑問と怒りを覚えた。人権は、性別、年齢、人種問わず、生まれながらに私たちに与えられた、人として生きるための権利だ。相手を否定することや差別することは、決して許されない。私たちには自由が与えられているからだ。ではなぜ、アフガニスタンの子供たちの願いは叶えられていないのだろうか。私はその答えを探した。

原因は二十三年間の内戦、教師や学校施設の不足、家庭の貧困だった。子供たちはどうすることもできず、ただこの現実を受け入れるしかないのだ。しかし私は、この現実から目をそらしてはいけないと思う。「仕方がない」という一言で私たちが片付けてしまったら、子供たちの自由を奪い、人権を無視することになる。私たちにはできることがあるはずだ。

私と母との会話の数日後、押し入れで眠っていたランドセルに使わなかったノートや鉛筆を入れ、アフガニスタンへ送った。六年間という月日を共に過ごしたということもあり、少し寂しい気もしたが、どんな女の子が使ってくれるのか、この一つのランドセルでどれほどの願いや夢を叶えることができるのかと考えると、とてもわくわくした。現在アフガニスタンでは、男子に比べ女子は学校へ通えていない。女性は六十八パーセントが文字を知らない。これには女子教育に対する理解が得

られないという文化的な背景もあるが、子供たちが男女関係なく教育を望んでいることを考えると、これもまた人権の無視ではないだろうか。

また、アフガニスタンでは、子供たちの「勉強がしたい」という願いや人権が守られていないことから発生している問題もある。大人になって家族ができても、自分自身やその家族の健康を守ることができないという問題だ。女性に比べ男性のほうが教育を受ける機会に恵まれていたとは言っても、男女とも決して満足な教育が受けられたわけではない。そしてそれが人の命に関わっていくのだ。女子にも小学校の初等教育六年間だけでも受ける機会があり、男女平等に紙とペンが配布されるようになれば、多くの命を救うことができる。そして、私たちにはその手助けができるのだ。日本からランドセルや紙、ペンが送られてくることで、貧困のために就学できなかった子供たちも、学校へ通えるようになったという。私たち日本人の優しさや思いやりが、子供たちの夢を叶え、人権を守っている。

私は今回、ランドセルを通して世界の子供たちの人権について考えた。日本では全ての子供が、小学校、中学校の教育を受けることが義務づけられている。私はこの中学三年の一年間を終えると、全ての義務教育課程を修了することになるが、振り返ってみると、つらいこと、苦しいことも多くあった。きっと、全ての人がそうなのだろう。しかしそれでも私たちは幸せなのだ。そしてその知識を、世界の子供たちの夢や人権を守るために使わなくてはならないと私は思う。これからも、自分に与えられた環境に感謝し、人権が尊重される社会づくりへ貢献していきたい。